

1～2歳の乳幼児における突然死 (SUDC) を予防するために実施される

昼寝時の仰向け寝サポートが、児の睡眠状態に及ぼす影響を検討

本研究会の研究チームメンバーである太田英伸 (秋田大学 准教授) らの研究グループ (日本赤十字社医療センター 小児科 大石芳久 医師・多摩北部医療センター 小児科 小保内俊雅 医師・聖路加国際病院 小児医療センター 中川真智子 医師・聖路加国際大学 草川功 臨床教授・東邦大学医療センター大森病院 新生児学教室 與田仁志 教授) は、日本 DC 研究会 (東京女子医科大学 仁志田博司 名誉教授・鳥取大学地域学部 儀間裕貴 特命講師) およびユニ・チャーム株式会社 (佐々木徹・佐藤俊仁) との共同研究を通じて、1～2歳の乳幼児の突然死予防のために昼寝の仰向け寝サポートを実施しても、児が十分な昼寝が取れることを明らかにしました。この研究成果は、英国のオンライン科学雑誌『*Scientific Reports*』に掲載されました (掲載日: 2020/7/20)

■ 論文情報 -----

Postural change for supine position does not disturb toddlers' nap
Hidenobu Ohta, Yoshihisa Oishi, Takako Hirose, Sachiko Nakaya, Keiji Tsuchiya,
Machiko Nakagawa, Hirotaka Gima, Isao Kusakawa, Hitoshi Yoda, Toshihiro Sato,
Toru Sasaki, Hiroshi Nishida, Toshimasa Obonai
Scientific Reports, 10, 11944, 2020 URL: www.nature.com/articles/s41598-020-68832-3

■ 研究の目的と内容 -----

小保内俊雅医師 (多摩北部医療センター) は、保育施設での突然死について調べるため、平成 20～24 年までの 5 年間の「保育所及び認可外保育施設事故報告書」を詳細に分析しました。その結果、5 年間に保育施設で死亡した乳幼児は 59 人、そのうち 50 人が睡眠中で、56%の体位が「うつ伏せ寝」でした。近年では、1 歳以上の乳幼児の突然死について「うつ伏せ寝」が危険因子である可能性が指摘されています (Crandall & Devinsky. Lancet Child Adolesc Health, 2017)。本研究では、保育士が園児の昼寝の体位および睡眠状態をモニターできるシステムを開発し、園児の「うつ伏せ寝」が検知された際には保育士に自動的に通知して、仰向け寝サポート (突然死を防ぐための体位変換) を実施しました。園児の睡眠状態を評価した結果、保育士による仰向け寝サポートの実施があっても十分な昼寝が取れることが明らかになりました。これまで、「体位変換すると昼寝を十分取れなくなる」や「一度に多くの園児の体位変換を完璧にすることは難しい」という声が多くありましたが、本研究ではこれらを科学的に確認し、乳幼児の突然死を防ぐ仰向け寝サポートの実施が必ずしも園児の昼寝を妨害するものでないこと、モニタリングシステムの利用によって少数の保育士でも園児の昼寝の状態を効率よく確認できることを明らかにしました。この知見は、保育現場における昼寝のルールづくりにおいて有用と考えられます。

■ 研究の内容に関するお問い合わせ -----

秋田大学大学院医学系研究科 精神科学講座 太田英伸 (研究代表者) E-mail: hideohta@med.akita-u.ac.jp

■ その他 -----

秋田大学プレスリリース <https://www.akita-u.ac.jp/honbu/event/item.cgi?pro3&871>